

大学の世界展開力強化事業(平成29年度選定) 東海大学 取組概要

【事業の名称】(選定年度29年度・(タイプA))

ライフケア分野における日露ブリッジ人材育成 —主に極東地域の経済発展を目的として—

【事業の概要】

日露間の関係深化と経済発展に資する人材の育成を目的とし、日露間の経済協力項目にもある「健康寿命の伸長」と「高いQOL(Quality of Life)を保つ健康長寿社会の創出」を担うライフケア人材を育成する。



【交流プログラムの概要】

本事業では、ライフケア関連分野を専攻、あるいは関心のある学生に専門知識を身につけさせ、日露のみならず、世界で展開する企業等で活躍できる即戦力の人材の育成を目指す。具体的には、日露の学生双方に興味を喚起させるための準備プログラムとしての短期海外研修(2~4週間/双方向)、セメスター単位で専門科目を学ぶ中長期交換留学(6/12ヵ月/双方向:単位取得型)、ロシアでニーズの高まっている画像診断・超音波診断機器等の技術習得を目指す実務研修と本学医学部生の海外臨床研修として派遣を行なう健診人材実務者研修(3~6週間/双方向)、そして、最終的にはダブルディグリープログラム(修士課程を対象、平成32年実施開始)まで、プログラムを発展させる。

【本事業で養成する人材像】

日露双方の学生に次の「4つの能力」を身につけさせる。(1)ライフケア分野に関連する広い専門知識(2)チャレンジ精神をもって実務に応用できる実践力、(3)確かな語学力とコミュニケーションスキル、(4)日本文化と異文化理解教育による確固たる世界観、歴史観。本事業で育成する人材は、両国の事情に明るいライフケア人材として、読影医や画像診断技師等の実務者として日本型ライフケアの輸出と現地での定着・普及を担うほか、ロシアに展開している日系企業や、政府、医療機関、NGO、NPO、健康関連産業(例: 商社、健康スポーツ、医療機器、生体検査、機能性食品、医療・病院コンサルタント、医療通訳等)で、日露の社会制度に精通し健康社会を牽引する即戦力として活躍する人材を養成する。

【本事業の特徴】

主となる連携大学である極東連邦大学(ウラジオストク)内に、本学の「極東オフィス」を開設する。同オフィスには、ロシア語/日本語の堪能なコーディネーターを配置し、派遣学生のケア、受入学生の渡航前教育、極東連邦大学及び他の連携大学との連絡調整をスムーズに、且つ効率的に実施する。また、上述の短期海外研修では、本学の海洋調査実習船「望星丸」によるウラジオストク訪問を実施する。日露の学生約100名が、洋上で文化・スポーツ交流、学生会議等を幅広く実施し、人的交流の拡大の一環とする。なお、平成33年度にはサハリン訪問も実施する。

【交流予定人数】

	H29	H30	H31	H32	H33
学生の派遣	15	70	30	30	75
学生の受入	15	60	30	30	65

1. 取組内容の進捗状況(平成29年度)

【東海大学】

【事業の名称】(選定年度29年度・タイプA(交流推進プログラム)主たる交流先の相手国:ロシア)
ライフケア分野における日露ブリッジ人材育成—主に極東地域の経済発展を目的として—

■ 交流プログラムの実施状況



〈平成29年度健診人材実務者研修〉

平成29年度は、平成30年度以降の中期・長期プログラムへの学生参加を促す準備期間として、海外研修プログラムと健診人材実務者研修を実施した。プログラムを通じて、日露両国におけるライフケア分野での社会問題、課題を認識し、高度医療・健康産業・公衆衛生の現場で最先端の技術と実例を学ぶ機会を設けた。スタートアップシンポジウムにおける事例紹介や、ウラジオストク北斗画像診断センターでのインターンシップを通じて、学生に実務的な即戦力人材として求められる知識や技能を提供した。産学連携体制によりライフケア分野での実務経験者との意見交換やネットワーキングの機会を積極的に提供し、学生の卒業後のキャリア形成に役立つ支援体制を構築した。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

15名の学生を派遣。海外研修プログラムとして、13名の学生を極東連邦大学に派遣。ロシアのライフケアを軸に文化や社会など学際的な分野を学んだ。また、2名の学生を極東連邦大学生物医学部、メディカルセンターに派遣し実務的研修を受けた。

○ 外国人学生の受入

極東連邦大学より15名の学生を受け入れ。13名は、海外研修プログラムの枠組みで湘南キャンパスでライフケア分野を中心として幅広い専門分野で学んだ。2名の学生は、本学医学部医学科と同付属病院で先端医療を含む日本のライフケア最新事情に関する特別研修を受講した。

	H29	
	計画	実績
学生の派遣	15	15
学生の受入	15	15

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

学生支援の総合窓口となる国際教育センターと国際交流・プロトコルを担うグローバル推進本部との緊密な連携と、プログラム運営委員会による全学の連携・協力体制の構築により円滑なプログラム運営が担保されている。また、大学評価委員会による内部評価と日露分野の有識者・実務経験者による独立した外部評価委員会において定期的に評価・答申がなされる体制となっている。定例の連携大学共同プログラム委員会にはロシアの連携大学の代表者が参加し、プログラムの充実とダブルディグリープログラム創設のための各大学との単位互換や評価制度の確認、統合に向けた調整を開始した。



〈極東連邦大学での修了書授与式〉

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

本事業を中心的に運営する国際教育センターは、留学生のための総合窓口としてのポテンシャルを最大限に活用し、来日前のビザサポート、来日中の履修指導、健康管理、日常生活、帰国後のキャリア形成などあらゆる場面において手厚い支援体制を構築している。派遣学生に関しても、渡航前指導や、渡航中の安全管理、学習指導、帰国後の就職支援など40年以上のロシアとの交流の知見と経験を最大限に発揮する環境を整備している。それに加えて、本事業専従のロシア語が堪能な国際連携コーディネーターと事務職員が事業の推進と学生のサポートを行い、充実したスチューデントアウトカムを実現する体制を保証している。極東オフィスの開設準備を加速し、更なる体制の充実を急いでいる。



〈サハリン国立総合大学との交流協定締結〉

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

学生支援の総合窓口となる国際教育センターでは多言語による学生支援や業務体制を構築し、グローバル推進本部とともに全学の国際化のパイオニアとしてその成果を学内で共有し、変革を加速させている。平成30年2月には本事業のウェブサイトの日・英・露三ヶ国語で開設し、世界に向けて本学の情報を発信する体制を整えている。さらに、パンフレットの多言語化や、ソーシャル・ネットワーキング・サイトの活用により従来の情報発信の手法にとらわれない21世紀型の事業推進を行っている。とりわけFacebookやTwitterでは学生の生の声を重視し、成果の普及や広報に大きく貢献している。



〈スタートアップシンポジウム〉

■ グッドプラクティス等

平成30年2月には本事業のスタートアップシンポジウムを東京で開催した。日露両国の政府関係者や、ライフケア関連の専門家、企業担当者、本事業参加学生など約120名の参加者があり、本学の取り組みや本事業について広く発信し、産学の垣根を越えた意見交換、協力体制の構築が図られた。

平成30年8月に計画される本学所有の海洋調査研修船「望星丸」による大規模交流事業の実施に向けて、展開力事業に採択された他大学との協力体制や関連する地元自治体との連携の強化が図られ、日本国内でも事業に関連した自治体外交への貢献や地域活性化への機運を盛り上げるなど想定を超えた波及効果が生み出されている。